

ったし、元治甲子の晩春は同年二月以後の僅かな間の出来事であったと推定する結果ともなつて興味深く、『医学選粹』第八号の本間玄調書、医道訓の記録にまで発展するに至つた。因みにこれを私の原著（『人文研究』第十号一―五三頁、一九七九年）の写真から再録すると図1―3の如くである。要するに中野先生は優れた稀に見る医人であり、私共若輩を鋭い感覚と弛みなき実践窮行によつて教導せられた大恩人であると同時に偉大なる不滅の功労者であつた。

謹んで先生の功績を追憶し、合掌して御冥福と、生涯苦業を共にされた御夫人はじめ御遺族皆様方の御健祥を祈る。

（一九八七・十一・十・稿、文献省略）

（大阪府高槻市）

## 市井の学医中野操先生

大塚 恭 男

中野操先生がお亡くなりになられてから早くも二年を経た。先生が名著『皇国医事大年表』を著されたのは昭和十七年、先生四十五歳の時であることを思えば、先生の学者としての息の長さ、その倦むところの無かつた究学の御生涯に尊敬とともに驚嘆の念を深くするものである。先生より三十年余り若輩の私にとつて、先生はまず怖い先生であり、ついでは頼り甲斐のある大先輩であつたが、甘えられる先輩というふうには遂にならなかつた。元来小心者の私は、憧憬の念を持ちつつも、気易くお話しをうかがう勇気が無く、従つて具体的な個人的つながりをいただくことができないうちに永久の別れをしなければならなかつたことはまことに残念でならない。

先生は明治三十年に京都にお生まれになられたが、永く大阪にお住みになり、市井の開業医として生涯を送られた。

「大阪に住んで半世紀以上、生を受けた京都以上に愛着を感じる大阪で……」とは、御著書『大坂名医伝』の「あとがき」に先生御自身が記されているところである。本書は『大坂医学風土記』、『大坂蘭学史話』とならぶ先生の大阪医学史三部作の一つであるが、これらの御著作に一貫して流れているものは、大阪という町とそこに住む町人、とりわけ医師に対する限らない愛情であろう。先生のいま一つの大坂関係の異色の御著書『大坂医師番付集成』も、町人の町大阪に生きる市井の学医を以て任ずる先生ならではの御作と思う。

先生の御著作の中の異色は『錦絵医学民俗志』であろう。先生が大正末年頃より昭和三十年頃までかかって集められた医事関係の貴重な錦絵の一大集成であり、肌で感じる生きた医学史の資料として、その意義はきわめて大きい。雨に濡れた御葬儀の日を思い、先生のありし日の温顔を偲びつつ。

昭和六十三年二月

(北里研究所附属東洋医学総合研究所)

## 中野操先生を偲んで

酒 井 シ ヅ

中野先生が逝かれてから、はや二年の歳月が過ぎようとしている。遠い地に住むため先生にお目にかかれるのは、一年に多くて数回と数えるほどであった。が、お会いすれば、いつも温顔で迎えられ、問えば何でも答えて貰える頼りある存在であったし、その博識に驚かされたものである。

しかし、ことが医史学会に及ぶと、理事ならびに関西支部の支部長として、ときには辛言を戴き、恐縮することが多か